

## 「汚れた霊に取りつかれた男を癒やす」

2021年10月18日

一行はカファルナウムに着いた。そして安息日にすぐ、イエスは、会堂に入って教えられた。人々はその教えに驚いた。律法学者のようではなく、権威ある者のようにお教えになったからである。するとすぐに、この会堂に汚れた霊に取りつかれた男がいて叫んだ。「ナザレのイエス、構わないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」イエスが、「黙れ、この人から出て行け」とお叱りになると、汚れた霊はその男に痙攣を起こさせ、大声を上げて出て行った。(マルコ福音書1章21節～26節)

主イエスは、ペトロ(シモン)とアンデレ、ヤコブとヨハネの4人を弟子に召し出した。一行はカファルナウムに着いた。カファルナウムはガリラヤ湖の北岸、湖畔の村でペトロの故郷である。安息日になり、主イエスは会堂(シナゴーク)に入って教えられた。会堂は、会堂司が取り仕切って、安息日には礼拝が行われていた。礼拝は、民衆に律法を教える律法学者が話すことが中心であったが、出席者の中から、話をしたい者は自由に話すことができるものであった。主イエスは、立ち上がって話をされた。これを聞いた人々は、その教えに驚いた。律法学者の教えは、律法を事細かく述べ、その解釈を延々と語り、律法を守らない者は神から厳しい裁きを受けるという決まりきった教えであった。主イエスの教えは律法学者とは違い、権威ある者のように教えられた。人々は、伝統からの膠着した解説、説明ではない、自分の存在をかけた教えを聞いた。それは、生ける神の恵みを身近に覚える神の権威を見るかのような教えであった。

この会堂に汚れた霊に取りつかれた男がいた。聖書には、霊に取りつかれた人がしばしば登場している。精神を病み、あるがままを受け止めることができず、従って、振る舞いも常軌を逸し、社会生活が守れない人のことで、彼らは悪霊に取りつかれた「罪人」と見なされた。いわば、神から最も遠いところに置かれた人である。この男が主イエスの教えを聞き、「ナザレのイエス、構わないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ」と叫んだ。彼は、ナザレのイエスを「神の聖者」と認識し、滅ぼされることを恐れ、構わないでくれと懇願している。悪霊は、神と対極にある存在であるが、その遠さにより、誰よりも神を認識させられる。人々は、主イエスの教えを権威あるものとは感じたが、彼は即座に、主イエスの本質を「神の聖者」と見極めた。自分たちを滅ぼさないでくれと、苦しみわめいている。パウロがローマ書5章20節で「罪が増したところには、恵みはなおいっそう満ち溢れました」と書いているように、罪は恵みを知る逆説的な働きをするのである。「イエスが、『黙れ、この人から出て行け』とお叱りになると、汚れた霊はその男に痙攣を起こさせ、大声を上げて出て行った。」主イエスが命じると汚れた霊は彼を痙攣させ、大声を上げて出て行った。人々は驚き、「これは一体何事だ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聞く」と論じ合った。主イエスの評判はガリラヤ地方の隅々まで広がった。主イエスが行った最初の奇跡である。

汚れた霊の人を癒やす奇跡を、私は下記のように捉えている。汚れた霊に取りつかれるとは、神でない地上のものを至上のものに見なし、それに、体と心の全てが支配されることである。お金や名譽、病気に取りつかれることもある。それらが絶対的な意味を持って、人を支配する時、人は正気を逸する。私たちはこの状態に幾度となく陥る。その状態から神のみを神とする時、汚れた霊から解放され、正気を生きる救いを得るのである。